慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	都市社会学の基本問題:アメリカ都市論の系譜と特質
Sub Title	
Author	吉原, 直樹(Yoshihara, Naoki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1986
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要:社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.26 (1986.)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告: 学位授与者氏名及び論文題目: 博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000026-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2つの意見測定間の時間間隔, 説得的コミュニケーションの極端さ, 説得の方向などの諸要内がどのようであろうとも, 説得コミュニケーションと被験者の意見の食い違いが小さいときに生ずることが確認された。したがって, ブーメラン効果に関しては, 認知不協和理論と社会判断理論が予測するところは不充分であり, これらの理論が予想する機制には再検討の必要があるとの問題を提起した。

筆者の Study 1 から Study 6 までの実験には、筆者の所属する大学の生産工学部の男子学生が被験者となっているが、この母集団内で一般化を試みるならば、相手を説得する場合には、相手の意見と大きく相違する要求をした方が効果的であり、小さな要求をすることは説得に失敗する可能性が高いことになる。

さて、本論文の中心的な課題であるブーメラン効果に関する実験的研究の論述については多くの先行研究を検討し、充分にくわしく述べているが、第1章において、説得の方法とその効果に関する科学的研究に触れたところでは、先行研究の紹介を軽く扱っており、1978年以降の研究を省略している。(但し、筆者が本論文提出後、「実験社会心理学研究」1984 に提出した筆者の論文には、充分な review がなされている。

つぎに、Study 1 から Study 6 にいたる一連の研究には、experimenter bias を除外する実験的工夫がなされていないので、実験結果の信憑性が問題となるところであるが、これはブーメラン効果を扱った今までのどの研究者も扱っていないので、この方面の研究者全体に対する将来的課題というべきであろう。

つぎに、「意見の食い違い(communication discrepancy)が小なるときに、ブーメラン効果が生ずる」という結果を本論文の最も重要な発見として報告し、そのメカニズムの説明のために、二面理論的仮説を提供しているが、このメカニズムの解明のためには、今後、意欲的な研究がおこなわれなくてはならない。

以上のような問題点はあるが、筆者が Study 1 から Study 6 に亘る一連の思索的な実験的研究において、被験者総数 3,056 名(有効数 2,969 名)に及ぶ壮大なる実験的研究を通して、ブーメラン現実生起の種々の条件や要因を明らかにし、従来の諸研究の綿密な 検討 とともに、二理大論の再検討を迫り、社会心理学会に対して、問題を投げかけた研究は、国際的にも評価され得る内容をもつものであるから、筆者である榊博文君は社会学博士の学位を受けるに足る者と判定する。

社会学博士

乙 第1588号 吉 原 直 樹 都市社会学の基本問題 ーアメリカ都市論の系譜と特質ー

〔論文審查担当者〕

主 査 慶應義塾大学文学部教授

社会学研究科委員 橫 山 寧 夫

副 查 慶應義塾大学名誉教授,文学博士

矢 崎 武 夫

副 査 慶應義塾大学文学部教授

社会学研究科委員、社会学博士

山岸 健

〔学力確認担当者〕

横山 寧 夫・矢 崎 武 夫 〔論文審査の要旨〕

立命館大学助教授吉原直樹君(以下敬称略)提出の主論文「都市社会学の基本問題一アメリカ都市論の系譜と特質一」(昭58年、青木書店)は、現在危機の様相を呈しているという都市社会学、とくにシカゴ学派を中心に発展したアメリカ都市社会学の「調査至上主義に裏打ちされた無理論的性格」をアメリカ社会体制の管理主義的思想の中に求め、そこに内在する幾多の矛盾を告発しようとしたものである。すなわち従来の都市社会学が自己完結的な都市領域をキー概念とすることによって、都市の危機を事実上体制的状況の視野の外におき、これが専ら「社会的統合のイデオロギー」を編みつづけてきたの危機を事実上体制的状況の視野の外におき、これが専ら「社会的統合のイデオロギー」を編みつづけてきる。「新しい都市社会学」の立場に拠りつつ以下に紹介する各章の諸問題について意欲的な研究を行っている。目次は次の如くである(細目は略す)。

序 章 都市の危機と都市社会学の新しい展開ーアメリカを素材にして一

第一節 「都市の危機」

第二節 都市問題と都市社会学の系譜

第三節 イデオロギーとしてのアメリカ都市社会学

第四節 都市社会学の新しい展開

第一章 人間生態学の展開―アメリカ都市社会学の源 流一

第一節 人間生態学と社会学

第二節 初期生態学の理論的立場

第三節 人間生態学の現代的諸潮流

第二章 イデオロギーとしてのアーバニズム

-L. Wirth; Urbanism as a Way of Life 再考-

第一節 Urbanism の論理とその特性

第二節 「大都市と精神生活」とUrbanism

第三節 パーク, ワースそして 1930 年代シカゴ

第四節 イデオロギーとしてのアーバニズム

第三章 都鄙連続体説と比較都市社会学の問

-R. Redfield の位置をめぐって-

第一節 都鄙二分法論から都鄙連続体説へ

第二節 都鄙連統体説におけるレッドフィールドの 「位置 |

第三節 都邸連続体説と比較都市社会学の間 第四章 イデオロギーとしてのサバーバニズム一戦後 アメリカ都市社会学の展開に関する一批判的考 窓一

第一節 サバーバニズムの論理

第二節 郊外化の実相

第三節 イデオロギーとしてのサバーパニズム

第五章 アメリカ都市社会学の基本的性格について

—D. Martindale, G. Sjoberg, M. Castells の 都市社会学批判をめぐって—

第一節 アメリカ都市社会学批判の試み(その1)

第二節 都市社会学の理論的危機

第三節 アメリカ都市社会学批判の試み(その2) むすびにかえて

シカゴ学派の都市社会学研究はわが国でも屢々論ぜられながら、吉原ほど系統的に各理論の内容を正確詳細に紹介また批判したものはわが国にはこれ迄に無かったといえよう。その意味でわれわれはこの論文を高く評価するものであるが、彼が構造主義的マルキシズムの立場からシカゴ学派を批判論述しているのに対して評者はむしろシカゴ学派の立場に拠って彼の論文の中の若干の問題を論評することにしたい。まず吉原の都市研究はシカゴ学派が形成された1920年から50年までを主な対象としているが、この学派の発展時における都市の状況、研究関心および方法と、1970年以降におけるそれとは全く異っていることは言う迄もなく、現在のシカゴ学派は全国の研究との相互浸透によって、曽てあった独自性は薄められており、従ってこの学派の古い研究のみを取り上げて、アメリカ都市社会学の批判を行うことには問題がある。

本書の序章「都市の危機と都市社会学の新しい展開」 は吉原の全体的構想を述べたところであるが、彼は都市 の危機を示す犯罪の増加、住宅放棄、中間層の都市脱 出、都市財政の危機などの問題をとりあげ、その底流を

アメリカの会社寡頭支配と階級支配の枠組をなす企業の 求心的傾向に求め、下層の集中、官僚制などがこれを助 長し、所得や公共サービスの不公平が齎らされたとす る。すなわち彼は、社会科学的危機として認識された都 市的状況をマルクス主義の主張する現代資本主義の危機 と直接に連動させる見方をとっている。資本主義社会に おける生産手段および管理単位の社会的空間的集中は、 消費手段の組織化と管理化を集中せしめ、組織化された 集団的消費は一定の居住空間を形成し、集団的消費の諸 施設をもつ場所となる。経済の矛盾は消費過程のレベル であらわれ、集団的消費手段が公共機関によって管理さ れる度合に応じて都市問題は政治化する。国家は空間的 配列を通じて日常生活の支配者となり、これが政治問題 化すると都市運動は先進社会における社会変動の重要な 現象を生む。消費的手段の生産、分配、管理をめぐる諸 問題は集団的消費手段への社会的要求と非収益性の矛盾 によって都市の危機を生み、財政危機という形で国家装 置に新しい矛盾を作り出す。吉原は、都市計画は政治過 程としてみるならば、交渉や闘争を通して社会階級を自 己表現するものであり、下からの地方政府の管理によっ て行われねばならないという。そして都市問題は地方問 題、経済成長、社会発展、政治統制などと関連し、これ ら国家と社会のフレームが中心的位置を占めねばならな いという立場からシカゴ学派を批判的に検討するのであ る。

第一章「人間生態学と社会学」 初期アメリカ社会学 における理想主義的、個人主義的都市研究の克服はシカ ゴ学派の人間生態学的研究をもって始められた。人間生 熊学は実証的研究、客観的理論の構成を指向 するもの で、尨大な資料を基礎にして都市に関する一般理論の構 成を図ってきた。吉原はパーク、パージェス、マッケン ジーの理論を紹介し、とくにパークの共棲的関係を基礎 とするコミュニティと、コンセンサスを基礎とするソサ エティの両分論の問題にふれ、さらにバージェス、マッ ケンジーの生態学的見地の継承発展に及びつつ、これら の見地は分業の地域的分布の関係を示すもの だとして も、階級分化の役割が理解されておらず、表面的な現象 の記述に終っていると批判する。さらに吉原は初期の生 態学を発展させたファイアレイやホーリーその他による 新生態学の見地を紹介している。新生態学は社会文化的 アプローチや行為論的アプローチとは異って外部から観 察できる人間の諸活動の相互依存の体系を研究する方法 であり、その焦点は広範囲に亘る社会構造の変動の解明 にある。吉原は新生態学の立場が生物的決定論であると しながら、方法的には一歩進んだものとして認めてはいる。新生態学の基礎的な仮説においては、人間の環境への適応は諸個人の間に発展する分業組織、技術の発展、生存の機会の増大によるものであり、組織は人々が自らを単位として維持しうる相互依存の全システムである。この意味で新生態学は社会のマクロ的構造分析方法であるが、吉原の新生態学が自由競争の段階から独占段階への移行に見合う形で旧生態学を再編しつつ受けつがれたものであると批判する。しかし新生態学はあらゆる現象を扱うものではなく、自ら方法上の限界を設けつつ、ホーリーやベリーの研究にみられるように、現代資本主義社会のみならず、古代、封建社会、発展途上国にも有効に適用されうる研究方法であり、この点に関する吉原の事実認識は充分なものとは言い難いと思われる。

第二章「イデオロギーとしてのアーバニズム」 この 章において先づ吉原はワースの理論に言及する。ワース は大きな人口、異種の諸個人、比較的永続する高密度の 集落に典型的に現われる社会的行為および組織の諸形態 にアーバニズムの特徴を見出し、そこに現代文明都市の 基本的な分析視角を求めた。吉原はワースの関心が主と して社会解体、個人の不適応、自律的な下位文化の存続 逸脱などの諸過程におかれているものの、これは第二次 的接触を基礎とするパーク以来の生態学的枠組や社会過 程の理論をキー概念として都市現象を解明しようとした ものであること、また都市化過程の説明変数によってパ ークの社会解体論から進んで社会変動論としてのスタイ ルにまとめたものであるという。彼はさらにワースをジ ムメルの社会心理学的都市論と比較して、ジムメルのい う都市の疎外は自由と個人化を齎らし, 文化の創造的力 を引出せるものであるが、ワースの場合それは社会解体 への恐怖と利害集団への不信を意味するものであると解 する。然しパークによれば競争から闘争、応化、同化の 過程を通して、生態的秩序から道徳的秩序が自動的に形 成せられ、これはパークのいう人間性に帰せられるので ある。また吉原によれば、ワースはコミュニティからソ サエティへの過程は見ているものの、規範的秩序の形成 が自律的な秩序にではなく、社会科学者や知識人の客観 的知識に依拠していると考えるところから、ワースには 政策志向の傾向があると指摘している。彼はまたカステ ルの立場に立って、ワースのアーバニズムの理論を特色 ずけるものは近代資本主義社会のもつ文化システム論で あり、こうした文化への社会統合の研究は資本主義を絶 対視する視点から歴史性を一方的に排除したイデオロギ 一的意味合いを帯びざるをえなかったと批判している。

しかしワースは都市計画論の中で自然的過程は都市構造を決定する条件であり、都市の構造条件が何であり、いかなる都市計画が可能であるかは都市に関する理論と実践の問題であるとしている。ワースにとって都市は相互に異った価値を担った人間が共同に生活する場である。実践としての都市計画は変化に対応するために人間の制度や思想を形成することである。すなわちワースは、社会階級や人種問題を軸に、人間生活の基礎的な条件を改善するために大衆民主主義の育成発展を必要とすると説いているのであって、決して理論的諸要素の構造関連のみを論じて事足れりとしているわけではない。

第三章「都鄙連続体説と比較都市社会論」 伝統的な 社会学のコミュニティ研究はテンニイスをはじめとして 都鄙二分法をとってきたが、これが都市と農村の関連と して問題とされたときには都市の農村支配という形で都 **鄙連続体説となって現われた。ワースは都市社会と、民** 族社会のコミュニティの理念型から都市化する社会にお ける人間結合の基本的分析モデルを得ることができると 考えた。一方、レッドフィールドは民族共同体、農村、 町、都市の変化を孤立性と等質性を独立変数としてとる ことによって民族社会から都市への発展過程を明らかに する方法をとった。吉原は形式的類似性に拘らず、両者 は本質的に異っているという。レッドフィールドの後期 の理論では、ローカルな生活体系におけるパースナルな 関係が構成する小さな伝統と、他方国家的な生活体系に 裏付けられたインパーソナルな関係が構成する大なる伝 統との相互関係に焦点がおかれている。さらに彼は文化 に関する独自な理論においてワースの理念型の直線的変 化に対して、伝統的組織と近代的組織の構造関連を明ら かにし共時的アプローチと通時的アプローチ を統合し た。この意味でレッドフィールドはワースのエスノセン トリズムを克服し、都市化はローカルな文化との関係に おいて解明しらるものになったと吉原は指摘している。 またショバークは前産業都市と産業都市との比較研究を 通して、分析モデルとして都市、文化的価値、権力、テ クノロジーの四変数を用いて前産業都市の普遍的構造を 作り上げた。しかし吉原はこの変数のうちテクノロジー が重視されていること、変動過程を含まず、生産関係を 無視して非歴史性に陥っていることを批判する。すなわ ちレッドフィールドの連続体説は上からの権力を伴う社 会解体論を砕く論理を含んでいたが、ショバークの比較 都市論はひたすら技術的手段化することによって統治技 術の下請け科学に堕し、矮小化の途を辿らざるをえなく なったと非難するのである。しかしこの立場はマルクス 主義の議論であって、ショバークは世界の諸地域の資料を基礎にシカゴ学派の人間生態学、階級や権力や値価の構造、都市性に関する従来の現論の問題性を克服し、新しい前産業都市の理論の構築を図っているのであって、経験的調査に基づく以上、取扱う現象に限界のあることは言う迄もないが、研究発展のための貢献は大きく、かつ有用である。この意味でそれはマルスク理論とシカゴ学派の立場の相異を明確に示したものといえよう。

第四章「イデオロギーとしてのサバーバニズム」 市における産業の集中や拡大、人口の流入などは人口の 高密度化、異種性の増大を生み、そこに現われる都市的 制度や態度は交通通信などを通して放射され、その周辺 を都市化してゆく。都市的社会現象は元来このような過 程からえられるものであり、これを基礎にして都市に関 する理論が構成されてきた。しかし都市の拡大の結果は 向心の過程の弱体化や、交通機関の発達を媒介にして産 業および人口の離心現象を生む。すなわち都市の人口増 加率は減少するが、都市周辺は人口増加率を高め、都心 には一定の機関および小数の人種を残すものの、多くの 機関および人口は周辺に分散して郊外化現象を生じ、サ バーバニズムといわれる新しい都市生活法 が生れてき た。郊外地域では一般に庭園を入った土地に創意の工夫 された住宅を建て、大体同一収入と同一の世代の家族が 住み、設備の整った公園、教育機関や教会などがあり、 子供の教育に熱心である。このコミュニティでは私的な 近隣関係が支配的で、住民自ら選んだ指導者によって行 政が行われ、それに市民は積極的に参加し、市民生活に 新生面を開いている。現在の中心都市の種々の悪条件の 問題は住民や職場を郊外に移すことによって解決しうる と一般のアメリカ人は考えている。このような傾向に対 して吉原はバーガーの調査による労働者の郊外化の現象 を挙げ、そこには言われるほどの同質性はなく大都市の 近隣性と同様であり、向上心もみられないこと、またガ ンスの中流労働者階級から成る地域の例では、経済的に も社会的にもまとまりなく、コミュニティ感情をもた ず、子育てに熱心でないという。吉原はアメリカの一般 の郊外論は匿名性からの脱却という一般的、抽象的な課 題の確認を行っているにすぎず, 上からの小都市的幻想 の伝統という組織化された同質的なイデオロギー的鋳型 に入れられたものであり、それは社会の再構成に連なる ものもっているという。吉原は郊外化の急速な発展は中 心都市における人口増加による住宅難、所得の上昇、と くに連邦政府の持家奨励政策、大規模な高速道路の建設 などの相乗作用によるものとし、またゴム、石油、車な

どより成る自動車複合体が国家投資の有効需要の源泉を なしているところから,郊外化は資本主義を維持するた めに促進されたものであると論じている。すなわち郊外 化のために国家の独占主義の住宅開発による多くの住宅 が建設されたこと、その間、大規模化、寡占化する住宅 産業が国家政策と結び付いたという。しかもこの住宅建 設が低所得者の住宅供給には適合せず、国家の政策が私 的独占企業の安定化の方向にのみ作用していたと主張す るのである。このような議論について、現在のアメリカ 社会の一部にこの傾向のあることは否定できないが、し かし住民は中心都市における犯罪の多発、交通の困難、 環境汚染、人種問題などを避けて郊外化し、新生面を開 く社会の建設に自ら投資しようとする傾向も見逃せず、 また都市の機能が一点集中的なものから多格化している ことをみれば、郊外化の促進が国家と独占企業との意着 ということだけで割りきることはできず、また逆に住民 自らの郊外化の傾向が、これに応ずる建設やモータリゼ ーションの開発を促していることも看過することができ ないであろう。この意味で吉原の議論は事実の一側面を 過大に強調しているともいえるであろう。

第五章「アメリカ都市社会学の基本的性格について」 最後に吉原はシカゴ学派に批判的立場にあるマーチンデ ール、ショバーク、とくにカステルを基礎に都市社会学 の再生論を展開している。マーチンデールはマックス・ ウェーバーの都市論を論拠に都市社会学の方法に関する 基本的な反省を求め、ショバークは調査至上主義を批判 するとともに、全体としての都市を把握するゲシュタル ト的なアプローチを提示した。吉原はこのような展望を 基礎にして都市社会学の実証主義が陥りつつある理論的 危機をある程度視野におさめていたが、最後に彼は彼の 批判の最も重要な根拠となっているカステルの理論を論 述する。前述マーチンデールはヨーロッパ型を絶対視す る立場からシカゴ学派を外在的に批判し、またショバー クはこの学派の部分的修正を迫っているものであるが、 吉原はカステルが都市社会の内在的批判を通して理論的 に再構成する方向にその危機論を展開していると高く評 価する。カステルによれば都市社会学の危機は理論的仮 説の不在であり、過去の都市社会学が可能であったのは 都市イデオロギーによるものであるという。これは従来 のアーバニズム論が資本主義的社会の合理化過程の文化 的表現となっていること、結局統合の社会学としてのイ デオロギー的機能をさすのであるが、カステルはこのよ うな従来の都市社会学の立場では問題を叙述することは できるが、現実の諸過程を説明することは困難であると

主張するのである。しかし都市の危機の他の多くの事実を捨象して資本蓄積の起動力の立場からすべての問題を解明しようとすることには問題がある。さらにファイアレイの都市文化が都市の空間的形態を決定するという立場に関して、吉原はそこに保守的イデオロギーを指摘するが、制度化したものが構造を決定することは当然であり、批判は制度がいかに変化するかという点におかれるべきであった。

以上吉原とは対立する立場から部分的な個所について 論評したものの、これはこの論文のもつ学問的価値を減 ずるものではない。都市研究への質献はそれぞれ異った 側面から相互補足的に研究の発展を求めるのが妥当と思 われる。吉原の提出した論文は彼の立場からの論理の立 て方、行文の筆力は堅実であり、アメリカ都市社会学研 究として冒頭に述べたようにわが国でも記憶さるべき文 献の一つとして評価できる。さらに内容の紹介は省くが、吉原にはこの書物の他に「地域社会と地域住民組織」(昭55年,八千代出版)の単行本があり、また本書の内容や意図を補足するものとして「都市社会学の新しい潮流」(「新しい社会学のために」第31号,昭59年)、「もう一つの都市社会学」(「地域社会学年報」第3集,昭59年)、「京浜、京葉の社会学的研究の動向と課題」(「地域社会の構造分析シリーズ」5)、その他翻訳としては C. G. ピックバンス「都市社会学」(恒星社厚生閣、昭57年)が あり、現在カステル「都市と大衆」の訳業に携わっている。このような業続からも分るように吉原はわが国の学界に対する大きな貢献をさらに期待されている研究者であり、われわれは彼の提出論文が社会学博士の学位を授与するに相応しいものであると認める。